

徐 紫桐

XU Zitong

ワークショップ活動における美術への受容意識の喚起 — 「模倣」からの再構築—

Increasing People’s Acceptance of Art through Workshop Activities: Reconstruction from ‘Imitation’

芸術支援領域



序章

本研究は、ワークショップの参加者が美術における表現・鑑賞に対する受容意識を喚起（ステレオタイプの解消、美術への動機づけ、美術活動への自己効力感の向上）することを目標として、「模倣」というテーマの表現と鑑賞の複合ワークショップ実践を行い、その活動による意識の変化を考察することを目的とする。人々の美術への興味関心を喚起するため、「個性」や「創造性」を「自由制作」で追求する芸術支援活動から離脱して、「模倣」を取り入れた活動から自分らしさを表現するルートを提案することに本研究の意義がある。

第一章 問題の所在：美術への受容についての現状と課題

本章では、先行研究における美術に対する意識調査を分析し、学生の年齢と学習の深化に伴い、小学生に比べて中学生および高校生は美術学習に対する興味を次第に失っている傾向が見受けられる。幼少時から美術学習が将来的に役立つなとの悲観的な見方を持っており、美術学習が彼らの将来の発展に実質的な助けを提供できないように懸念された。さらに、本研究の研究対象としての20代の非美術専攻の学生に対して美術への受容状況及び原因についてインタビュー調査を行った。

その結果、他者の視線を気にして、自分の作品に対して肯定的な評価ができない学生は単に自由に制作させることは逆に混乱させてしまって、既存の思考ロジックに従い「正解を見つけ出す」ことで直面する制作困難を解決しようとしていた。これはまた「美術に正解がない」という考え方と矛盾している。この二律背反のような状況下で、自分が満足できる作品を制作できない学生は、容易に「美術の才能がない」と自己評価してしまう。このような単純な帰結は、学生たちが美術に対してステレオタイプや抵抗感を抱き、美術との関与を自発的に放棄する原因となっているのではないだろうか。本

論文では、それらを「苦手意識の葛藤」と定義し、美術についての思考において悪循環を生み出すものと捉えた。

第二章 美術への受容意識の喚起の視点
美術教育における受容意識の喚起は、学生が美術に対して持つ潜在的な理解や興味を引き出し、豊かな感受性や創造性を育むと考えられる。美術作品を単なる視覚的対象としてではなく、文化的・感情的・知的に深く関与し、理解しようと、学生が自己の内面と外界の美術作品との対話を通じて、自己の感性や表現力を高めるために重要な概念である。

本章では、美術への受容意識の喚起の効果を具体的に三つの視点に分けた。
視点①:ステレオタイプの解消。前章での20代の学生に対する美術への意識調査の結果によると、非美術専攻の学生は表現技法の学習における技術的な難しさや「苦手意識の葛藤」という認知上の難しさ、また、芸術家を「すごい人」「ミステリアスな人」と評価し、尊敬の念を表しながらも、芸術の分野で自分よりも上位の階層にいると考え、その階層が自分とは無関係で越えられないと信じており、最終的にアーティストや美術活動を自分の生活と関係のないものとする傾向がある。本論文ではこの美術に対して持つステレオタイプを「芸術家神性への迷信」と定義する。

視点②：美術への動機づけ。美術への動機づけは、受容意識を高める上で重要な役割を果たす。美術活動に対する内発的な関心や好奇心の引き出しは、参加者が美術を積極的に探求し、楽しむための基盤となる。

本研究では、動機づけに関する探求がステレオタイプの解消と繋がると考える。創造的な活動を触発する「模倣」に着目した表現と鑑賞の複合的ワークショップ活動への参加を通じて、美術に対するポジティブな体験を促し、参加者の認知的バイアス、すなわち芸術家に対するステレオタイプを解消することができるかを検討する。また、活動中にアーティストの活動への共感を促し、美術活動へのア

クセスを容易にし、それを通じた自己表現や創造性の発展を促進し、美術への動機づけを生み出すことを目指している。

視点③:自己効力感の向上。美術活動における自己効力感の向上は、参加者が自信を持って美術活動に取り組み、自らの感性や創造力を発揮すると考えられる。本研究では、自己効力感を高めるため、成功体験の提供、目標設定の支援、フィードバックと評価の適正化などに注目する。参加者が自分の作品に対してポジティブな評価を受けることで自信を持つようになるほか、適切な目標設定を通じて達成感を感じることができる。

第三章 美術への受容意識の喚起を促すための「模倣」の着目

本章では、美術教育における「模倣」行為の重要性と効果に焦点を当て、前章で提出された「美術への受容意識の喚起」の問題に対する解決策として、「模倣」という方法を提案し、その可能性を探求した。教育における模倣の役割は非常に重要であり、子どもたちの社会的、認知的、創造的なスキルの発達において中心的な役割を果たしている。そして個人だけでなく、社会の発展にも密接に関連している「模倣」という行動は、日本の歴史を通じて重要な役割を果たしてきた。模倣が単なる真似事にとどまらず、創造的な発展へとつながる可能性を持っていることを示している。

美術教育の観点から、模倣は単なるコピーを超え、技術の習得、スタイルの理解、そして最終的には個人的な表現へと進化する過程の基盤になると考えられる。美術についての認識の変革を個人に焦点を当てて論じ、同様の効果を生むことを目指している。「芸術家神性への迷信」を持つ非美術専攻の学生にとって、既存の作品を創造的に「模倣」することにより、自らの認識の世界内で美術作品の「神性」を打破し、美術に対するステレオタイプを解消し、これによって、美術に対する受容意識を喚起することができるのではないかと考える。

第四章 表現と鑑賞の複合的活動による美術への受容意識の喚起の着目

第四章では、美術への受容意識を喚起するための「表現と鑑賞の複合的活動」という方法に注目し、その理論的根拠と実践的な可能性を探求した。先行研究の整理を通じて、表現と鑑賞が相互に関連し深化するプロセスを明らかにした。表現と鑑賞の一体化を先行研究から検討し、表現と鑑賞の複合的活動についての考察を行った。これにより、表現と鑑賞が組み合わせられることで、アートに対するイメージが表現と鑑賞に対する動機づけが促されることが示されていた。また、表現と鑑賞の複合的活動が美術への受容意識の喚起にどのように寄与するかについて論じ、これらの活動と受容意識の喚起の要素との関連性を明らかにし、表現と鑑賞の複合的活動は、美術教育における受容意識の喚起を促進する有効な手段であることが示された。

第五章 ワorkshop活動における美術への受容意識の喚起の提案：「模倣」からの再構築

第五章では、美術作品から触発される創造的な「模倣」と「表現と鑑賞の複合的活動」を中心に据え、美術活動および美術全体に対する参加者の受容意識を向上させるワークショップ活動を提案し、小規模実践を実施した。

実践では20代の非美術専攻の初心者学生が対象で、美術館での鑑賞活動とオンラインでの表現活動が1時間ずつ行われ、参加者は鑑賞した作品に触発されて模倣と創作を行う。最初に、参加者を選定し、各参加者に美術への意識調査のインタビューを実施した。この回答を分析することで、各参加者に適した鑑賞活動を構築した。その後、一対一のワークショップ活動を実施した。実施後、アンケート調査を実施し、アンケート結果および参加者の鑑賞と制作プロセスにおける言動を分析した。実践が一定期間経過した後、参加者に対して追跡調査のインタビューを行った。参加者が活動後に示

した長期的なフィードバックを把握し、この実践の長期的な効果を判断した。これらの手順は、実践の考察手法を構成し活動の実効性および参加者への影響を包括的に評価できると考えられる。

今回は日本人のYさんと中国人のNさんという2人の女性を選定して個別に実施した。実践により、2人の美術への受容意識の喚起のプロセスを明確化した。本実践への参加は、事前調査で明らかにした「芸術家神性への迷信」と「正解を探す傾向」というステレオタイプの解消にも寄与したと考えられる。美術に関する経験が乏しい2人の参加者が活動に参加した後、今後も美術鑑賞や制作活動に対する関心を持続させる意向を示していること、また美術館や展覧会に関する情報への探求心が高まり、鑑賞する時間が増加し、多様な表現への注目が見られることから、本実践は美術活動への参加意欲を高め、美術への動機づけを強化する効果を有していると示唆された。実践の2.5回目において、それぞれ自分のSNSを通じて自分の作品を外部に展示したこと、実践後の調査で自己表現に対する興味生まれたことは、自分の作品や能力に対する自信の表れであると考えられる。本論文では、これを自己効力感の向上の一つの表現として捉えた。

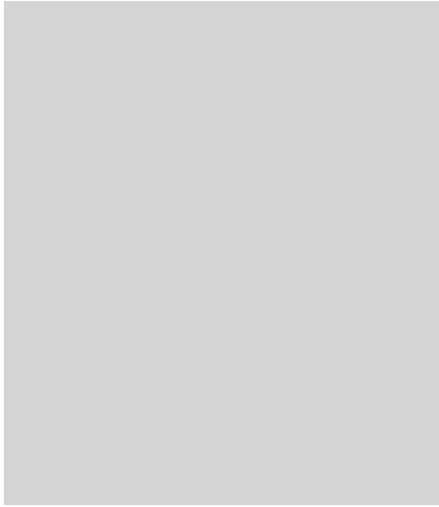
終章

本研究は、20代の非美術専攻学生を対象に、美術に対する苦手意識の実態を踏まえてその原因を「苦手意識の葛藤」であるとし、この問題に対処するために、本研究は美術作品から触発される「模倣」と「表現と鑑賞の複合的活動」を中心に据えた美術ワークショップ活動の構想を提案した。従来の表現と鑑賞の相互効果を利用する活動事例は、主に学校教育の範囲で、授業の一環としての実践であったが、本研究は、美術に対する苦手意識を持つ非美術専攻の20代学生を対象として、美術館での自発参加のワークショップ活動を設計して実践した。非美術専攻の学生が美術への受容意識を喚起したことは、自発的に美術に関与するこ

とに寄与した。また、参加者一人ひとりの特定の興味や好奇心、苦手意識に基づき一対一で個別に設計されたオーダーメイド式ワークショップ活動の優位性が示唆された。参加者の個別の関心や趣味を活動に取り入れることで、参加者は美術活動に対してより強い興味を持ち、積極的に参加することが期待でき、一対一の対応は参加者にとって安心感を提供し、自己表現の場としての役割を果たし、自己効力感の向上に繋がった。

さらに、「ステレオタイプの解消」、「美術への動機づけ」、「自己効力感の向上」という三つの視点を設定し、これらを通じて美術への受容意識の喚起を測定するための枠組みを提案した。本研究で行われた具体的なワークショップ活動を通じて、これらの視点が美術への受容意識の喚起に有効であることが示唆された。

これにより、美術教育の分野では、学生の資質や能力だけでなく、美術に対する興味や関心を高め、より包括的な教育的成果を目指すことが可能と考えられる。ただし、本研究は二回の一対一の実践に基づいており、将来的にはより大きなサンプルを用いて研究を行い、結果の信頼性と有効性を高める必要がある。そして、本研究で提案されたワークショップ活動は、非美術専攻学生を対象とした学校活動や学校と美術館の連携活動において実践的な応用が期待される。



図版1：ワークショップ参加者の作品（筆者撮影）